

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25501027

研究課題名(和文)和船を活かした遊覧・船祭りの観光学 「日本の流域遺産」化をめざして

研究課題名(英文) Tourism study of sightseeing and boat festival using Japanese traditional wooden boats

研究代表者

出口 晶子 (DEGUCHI, AKIKO)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：00268385

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、和船を活かした遊覧観光と船祭りについて研究し、全国の内水面遊覧と海の船祭りの最新のデータベースを作成した。伝統的木造和船は、漁業や水運ではほとんど消滅したが、遊覧船や祭りの船では存続し、今後もその可能性がある。こうした和船文化を守るには、船大工が船頭を兼ねるローカルな労働システムを持続することや、行政が船大工を無形文化財として保護し、後継者育成をはかる仕組みを確立することも重要である。また年に一度の船祭りだけで和船技術を維持するのは困難だが、和船遊覧にみる建造機会の増加は、伝統ある船祭りを存続させていくのにも役立っている。

研究成果の概要(英文)：In this project, I have researched the inland water boat tourism and maritime boat festival in which Japanese traditional wooden boats (wasen) are used, and made the latest database of them in Japan. Wasen have almost disappeared in the fishery and water transport. But they still survive as pleasure-boats or festival boats in some regions. It is possible that this situation also continues in the future. To preserve the wasen culture, it is important to maintain the local labor system in which one person works both as a boat-builder and boatman. It is also important that the government establishes the protection systems, to protect the boat-builders as intangible cultural properties and foster their successors. The sole annual festivals cannot offer boat-builders enough occasions to maintain their wasen construction technology. Today, however, tourism is providing increasing building opportunities of wasen, thus proved useful also for the protection of the traditional boat festivals.

研究分野：民俗地理学

キーワード：和船 文化継承 遊覧 船祭り 観光学

1. 研究開始当初の背景

日本の伝統的木造船(以下和船)は、その操船・造船技術を含めて世界に誇れる特色ある文化遺産である。今日和船の利活用は、遊覧と船祭りの現場にほぼ集約されるが、1997年の河川法改正以降、川や湖、池、堀などの遊覧事業は全国的に増加し、そのなかでも和船を活かした取組みが少しずつ増えるようになってきている。漁業や水上運搬における和船の需要が近代以降減少の一途をたどり、職業的になりたなくなっていく結果、木造船の技能をもった舟大工は激減し、船釘等関連用具の諸職も舟大工以上に消失の瀬戸際にある。したがって和船を活かした遊覧・船祭りの技術文化継承には様々な課題が横たわっている。

このままでは担い手の不足により、和船を特色とする遊覧や船祭りも一挙に衰退しかねない。そうした窮状を打開し、魅力ある持続可能な観光へつなげるためには、観光を回路に和船の文化遺産化とむきあう必要があり、全国の諸事情を広く俯瞰し、個々の遊覧・船祭りにおける利活用の実態と将来性、直面する課題群を抽出する基盤研究が要請されている。筆者はライフワークとして木造船文化の研究に取り組む一方、数年来、流域を単位として山河海をつなぎ、広域観光を促進する遺産化の構想である「日本の流域遺産」に取り組んできた。ここに和船の技術継承と観光資源化の実現双方に寄与する観光学を実施することで、「日本の流域遺産」化構想をもさらに推進していけるものとする。

2. 研究の目的

遊覧と船祭りによる和船の観光資源化は、今日、和船の技術文化を良好な形で継承していける最後に残された舞台である。そのため本研究では、和船の技術継承と観光資源化にまたがる独自の取組みをほりさげ、特色ある和船観光を末永く継承していく回路を見いだすことを研究の目的とした。本研究では、まず全国を網羅した遊覧・船祭りのデータベースを作成した。そして現地調査は、(1)和船の新造や修復、利活用の機会をいかに確保し、質の高い和船技術を次代に継承しているか、(2)上記の道筋の確保によっていかに特色ある観光資源化を実現できるかに照準をあわせて実施した。これにより観光の短期・長期的視野にたつて和船の技術継承の窮状を打開し、今後のローカルな対策にも役立てることをねらいとした。

3. 研究の方法

(1)和船による遊覧・船祭りの最新のデータベース化

①全国の遊覧事業については河川にくわえ、湖・堀・ダム湖・池など内水面で実施されているもの、和船以外の遊覧も含めて最新のデータベースを作成し、各地の遊覧の特色を総覧できる基礎資料にまとめた。

②船祭りについては全国の船渡御や競漕行事を中心に、屋台や山車など舟形をかたどりオカあがりして展開する祭りもあわせてデータベース化を進め、現地調査実施のさいの基礎資料とした。

(2)和船を活かした遊覧・船祭りの現状と課題に関する現地調査

世界遺産・ジオパーク等当該エリアの遺産化の動きにも注目しつつ、遊覧・船祭りに求められる和船舟大工や船頭の養成方法、観光資源としての将来性について実地に検証、具体的対策を検討した。3年間で実施した主な現地調査地と調査内容は以下のとおりである。

①木造船を含む遊覧事業の調査

北海道：洞爺湖・大沼・小樽運河

東北：青森県十和田湖、福島県只見川・桧原湖

関東：栃木県鬼怒川・巴波川、群馬県谷田川、

神奈川県宮ヶ瀬ダム、富士五湖

中部：静岡県今切、愛知県牛川・中野

近畿：兵庫県姫路城堀割、滋賀県琵琶湖、大阪府淀川

瀬戸内：広島県音戸瀬戸、岡山県高梁川水江、香川県高松玉藻公園

九州：鹿児島県川内川、熊本県江津湖、宮崎県高千穂峡など

②木造船を中心とする船祭り

北海道：二風谷アイヌのチブサンケ(舟おろし)祭り

大平洋：茨城県鹿島の御船祭り、和歌山県古座川の河内祭り、串本の水門祭り

日本海：福井県大島の通し合い

瀬戸内海：広島県豊島の權伝馬

沖縄：糸満ハーリー、喜屋武ハーリー、大宜味村のウンジャミ祭りなど

4. 研究成果

(1)和船を活かした河川観光舟運

まず河川観光舟運については、湖・堀・ダム湖・池などを含めて日本全国を網羅し、そのなかで和船の利活用の方法と課題について検討し、2015年度現在の成果をとりまとめた。約5年にまたがる研究蓄積により、河川観光舟運の現地調査はおよそ全国の8割に達している。その形態はおよそ①鵜飼観光、②渡し、③川下り、④船めぐりに分類できる。10数箇所ある鵜飼観光では、木造船の利活用が多く認められる。なかでも岐阜市は行政の主導により鵜飼にかかわる舟大工や船頭を無形民俗文化財に指定し、戦略的に文化財保護の制度を活用することで後継者を保護育成する取組みが効を奏している。

生活とかかわる渡しは1970年代と比べても大幅に減少しているが、残る渡しは観光的な役割がみられ、その存続を支援する動きもある。萩の鶴江の渡しや瀬戸内海の音戸渡船などは木造船を継承する最後の渡船である。

川下りは近世・近代には物資や人の輸送手段であったが、鉄道やトラックなどの陸上交通に転換されるなか、その技術を遊覧に振り向け、定着したところが多い。船下りの名所地は全国で 20 箇所ほどあるが、このうち木造船で実施するところが約 4 割にのぼる。これらのなかには船頭が舟大工を兼ね、自前で舟を建造できる仕組みをもつところが少なくない。



写真 1 氷見の花見遊覧（富山）＊
（＊撮影：出口正登 以下同じ）
NPO が桜のシーズンに運営する



写真 2 近江八幡の水郷 ＊
櫓こぎでゆく



写真 3 高梁川水江の渡し（岡山）＊
橋がかかり、2016 年 3 月で廃止された



写真 4 狛鼻溪（岩手）

船めぐりでも東京の横十間川や、群馬県谷田川の揚げ舟、富山県氷見の湊川の花見遊覧など木造船を活かした取組みが近年各地であらわれている。NPO などの組織により季節限定で実施されるなど、小規模ながら地域色のある活動が定着しつつある。

このように木造和船を活かした取組み地域は全国で約 50 か所、河川観光舟運全体の約 2 割にのぼる。このことは、生業の場面ではほとんど使われなくなった木造船の技術が観光の領域ではなお存続可能であり、その継承が現実味をもつことを意味している。鬼怒川や狛鼻溪などの川下りのように船頭が舟大工を担い、遊覧事業の合間に船造りに従事する仕組みができているところや長良川鵜飼のように行政主導で舟大工等を無形文化財化し、後継者を保護育成していく方向が有力な継承方法として見いだせる。他の地域では古船の活用や在地の舟大工不在を克服するため、遠方へ発注し調達する方法もみられる。こうした傾向は舟大工にとどまらず、船頭の技術においてもあてはまる。NPO で運営される比較的小規模な近年の遊覧事業では、船頭は各地の遊覧事業と幅広くかわり、船頭として、またその指導者としての活躍がみられる。小規模な遊覧を「細く長く」定着させていくには、こうした広域連携は欠かせない。その場合課題となるのは、細部にわたるローカルな技術継承をどのように保証していくかであろう。



写真 5 音戸渡船（広島）＊
瀬戸をゆく木造渡船

(2) 和船を活かした船祭り

木造和船を活かした遊覧は、内水面に多く、海では、佐渡のタライ舟観光や瀬戸内海音戸渡船、広島の本瀬の鯛網観光や熊本の帆引き観光見学などにとどまる。それにたいして、和船を活かした船祭りは、圧倒的に海を舞台とするものが多い。船祭りの祭礼はおよそ年に1度であり、奄美の舟こぎ、沖縄のハーリーや長崎のペーロンは春から夏、瀬戸内の権伝馬は秋に集中する。船祭りのなかには、1年に1度ならぬ12年に1度、60年に1度の行事もある。したがって祭りの細部や船祭りの全体像を俯瞰するには、今後のさらなる継続調査が必要であるが、本研究では水上で舟を浮かべた競漕や巡幸行事を中心に、北海道・日本海・太平洋・瀬戸内・東シナ海とエリアを分け、代表的な船祭りを実地調査した。その結果、以下の傾向が明らかとなっている。



写真6 喜屋武ハーリー（沖縄）



写真7 古座川の河内祭り（和歌山）
夜の川面に浪々と唄が流れる

①河川観光舟運が全国の都道府県に広くゆきわたると同様、船祭りも、新生の祭りや水上に浮かべない舟形屋台・だんじりなどを含めるとすべての都道府県に見いだせる。ただし、船祭りが盛んであるのは、圧倒的に西日本である。とくに沖縄にみるハーリーや長崎周辺にみるペーロンなどは沿岸各地で同日あるいは毎週のように開催され、とも



写真8 相生のペーロン（兵庫）*
長崎からもたらされた。もとは中国由来と伝えられる



写真9 豊島・権テンマ（広島）*
権はオール権 櫓こぎのテンマもある

にパドル操法を基本とし、習俗の起源は中国であることをそれぞれに伝える。船体は沖縄ではサバニ、長崎や相生ではミヨシのたった板舟でその形状は異なる。いずれも競漕用に特化され、進化している。瀬戸内海のテンマ船を用いた権テンマや櫓こぎテンマはパドル操法ではなく、オール式の権と櫓を用いており、ハーリーやペーロンとは異なる文化を継承する。

③舟を浮かべた祭礼や競漕行事がおおむね海を舞台とするのにたいし、川を舞台とするのは、和歌山県の古座川の河内祭り、熊野川の諸手船神事などである。また海のない県でありながら、長野県は舟形をした山車が多くみられる。舟形だんじりの場合、北海道の江差や静岡、瀬戸内の香川や岡山などの港では、弁財船や安宅船等近世の精巧な造船技術を反映したものが展開するのにたいし、長野県は安曇族にみる海の記憶と結びつけた言説が語られ、象徴性の強い舟形が特徴となっている。

④北海道二風谷アイヌのチマサンケ祭りは丸木舟の舟おろしの行事を「二風谷の祭り」に進化させた新生の船祭りである。沙流川での丸木舟乗船体験ができ、すでに2015年現在、46回を重ねた。和人の舟の代表として木曾川の川舟も登場する。船祭りとして伝統の単材丸木舟がこれほど定着した例は他になく、アイヌ文化を継承するための国際色豊かな祭りとなっている。



写真 10 二風谷アイヌのチナサンケ祭り（北海道）

沙流川を丸木舟でゆく

以上のように、木造の伝統和船は、漁業や運送業ではほとんど消滅したが、遊覧や船祭りの現場では存続し、今後も残っていく可能性をもつ。もっとも年に一度の船祭りだけで和船技術を維持するのは困難である。そのため和船遊覧にみる建造機会が増加することは、伝統ある船祭りを結果的に存続させていくと考えられる。その場合であっても広域連携は欠かせない。

神奈川県真鶴では、国の重要無形民俗文化財に指定されている船祭りの木造船を新造するさい、四国から調達したという。兵庫県赤穂市坂越では、国の重要無形民俗文化財である船祭りに使われる木造船を修理のできる舟大工がいなくなり、継承が危ぶまれた。幸い木造高瀬舟による遊覧が姫路の堀割で事業化され、その船頭兼舟大工である若手継承者が誕生している。彼等が、今後船祭りの船の修繕等をも担っていく可能性が高い。



写真 11 世界遺産・姫路城の堀めぐり
櫓こぎの高瀬舟の訓練風景

①広域ネットワークによる技や人の融通、②船頭が舟大工を兼ねるローカルな労働の仕組み、③行政主導による舟大工や船頭の無形文化財化など、和船を活かした遊覧・船祭りの現場は、種々の工夫により、舟大工不在の現代にも、観光が和船の活きられる場となっている。

全国規模で実施した本研究成果は、行政の

観光・文化政策にも資するところが大きく、各地からの協力要請の依頼がある。今後さらに論文・著書等で公刊するほか、各地の要請に応え、知見は地域振興に活かしていく。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2件）

①出口晶子、出口正登、和船を活かした河川観光舟運、甲南大学紀要文学編、査読無、166、2016年、193-212

②出口晶子、平生鈞三郎の「常ニ備へヨ」一日記の沈黙と水害記念帳、甲南大学総合研究所叢書、査読無、127、2016年、99-124

〔学会発表〕（計 2件）

①講演 出口晶子「海の道、川の道」

出口正登「港の景観・舞鶴」
舞鶴市郷土資料館企画記念講演会 舞鶴市教育委員会、舞鶴市西総合会館 2015年5月31日

②講演 出口晶子「琵琶湖周航 丸子船 その建造記録から」

出口正登「琵琶湖周航 目で見る琵琶湖」
大津市ほくぶん塾、大津市北地域文化センター、大津市教育委員会 2014年9月4日

〔図書〕（計 0件）

〔その他〕

ホームページ等

①出口晶子「日本学入門—神戸から」『「日本学」へのいざない—歴史文化学科で学ぶために』(歴史リブレット No. 1) 甲南大学文学部歴史文化学科、2016年、2-6

②新聞記事 えりも町のコンブ漁に使われるイソブネ調査について日高報知新聞より取材をうけた新聞記事 2015年8月25日

③新聞記事ほか 滋賀県塩津港で出土した木造船とみられる部材にたいする鑑定と所見、ならびに新聞各紙・テレビ等の報道への対応 2015年12月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

出口 晶子 (DEGUCHI, Akiko)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：00268385

(2) 研究協力者

出口 正登 (DEGUCHI, Masato)

写真家